

## 5 現地視察レポート

宮城大学事業構想学部 4年 及川 沙紀

今回の事業は、領土問題解決の難しさを改めて実感させられたとともに、国政に関心をもち、一国民として主張をもつことの大切さを痛感させられる内容だった。

まず感じたのは北方領土との距離の近さだった。視察2日目、私たちは別海町の観光船で国後島を洋上から視察した。野付半島から国後島までの距離は16km、さらに中間ラインの8kmまで進み、国後島を眺めた。天候が良かったこともあり、島をはっきり確認することができた。また、双眼鏡越しには国後島の建造物を確認することができた。また、4日目は納沙布岬から貝殻島まではわずか3.7kmという近さから、歯舞諸島を確認することができた。日本は島国であり、他国と比べて国境という概念を感じる機会が少ない。目の前に自分の故郷を前にして、目には見えない越えられない線があるという元島民のもどかしさを想像することは容易だった。納沙布岬には数々のモニュメントや石碑が点在し、北方四島返還に対する人々の思いがぶつけられていた。実際に現地に行って目で見ることでしか味わうことができない現実であった。

また、世代間で意識に差が生じていることも分かった。視察2日目、私たちは道立北方四島交流センターニ・ホ・ロで元島民の方、根室市の市役所の方の話を伺った。色丹島の元島民の中田さんは、自らの島での経験や領土返還に対する強い想いを語られた。日本固有の領土であることは確かであるのに、いまだ返還に至っていない現実には憤りを感じられていた。一方で3日目の同施設で高校生との意見交流会では、異なる意見を聞くこととなった。話を伺った高校生は署名集めや北方領土に関する出前講座を務めるなど、領土返還の活動に積極的に参加されていた。一方で、領土返還には中立的な考えを持っていた。私が話を伺った高校生の方はビザなし交流で北方領土に訪問し、現地のロシア人との交流を経験している方だった。その人の話によると現地のロシア人の意識は日本人と異なることが分かった。現地のロシア人は領土に関しては日本固有の領土であることを認めていながらも、どうすることもできず、日本人に対して申し訳ない気持ちをもっているというような話をされたという。こういった経験から、高校生はむしろロシア人との共存という解決の方法を考えているという胸のうちを話してくれた。この意見は私にとっては思いがけない内容であった。しかしながら戦後68年が経過し、四島にはロシア人の生活が定着している今、四島の完全な返還は現実的ではないように思われるのも確かであった。

今回の視察を通して、誰もが強い想いをもちながらも、解決できないもどかしさを持っていることを知った。領土問題の解決には国が動く必要がある。その国を動かすのは国民である。一人ひとりが社会の問題に関心をもち、主張していかなければ特にこのような国際問題を解決するのは困難であるということを再認識させられた。私に今できることは今回の経験を周囲に伝え、今後も問題解決に想いを寄せていくことである。北海道に最も近い東北から、同じような問題意識をもって問題解決の糸口をこれからも探っていきたい。

研修前レポートにおいて、私は北方領土問題に関して、当時の国際関係などのマクロ的な視点で理解することに努め、研修中には、ミクロ的な視点で、現地の歴史を学ぶことを中心にすることとした。その結果として、北方領土問題に関して両方の観点から知ることができ、自分の意見を持つことができた。

まず、実際に北方領土を目にした感想から述べたい。2日目の国後島洋上視察と、納沙布岬からの歯舞諸島望見において、実際の北方領土の島々の近さを体感した。国後島は、洋上から双眼鏡を用いて島の外観がおぼろげに見える程度の近さであった。歯舞諸島は、最も近い貝殻島が納沙布岬から3.7kmの距離にあり、双眼鏡を覗くとロシア船が確認できる近さであった。間近に見える海の中腹にある白波を超えてしまうと、ロシアによって拿捕されてしまうという現実を目の当たりにした。また、現地に向かう途中にバスガイドの方からお聞きした、実父が拿捕された話、ロシアとの漁業協定を結ぶ経緯、ロシアから漁業権を買っている事実などから、現地の人々の生活に及ぼしてきた影響は計り知れないものであると感じた。

次に、北方領土における生活について述べる。前回行われた北方領土青少年視察事業の報告書によると、北方領土最大のギドロストロイ社により、島の道路整備や湾岸設備が整えられていることが多いそうである。また、島の住民の中には、国のインセンティブにより島に住む人々も多いそうである。これらに加えて、今回、現地に行った高校生との意見交換会において、私が注目した点は、島の人々は漁業関係者が多いが、常に住んでいる人は少ないという話があった点である。戦前も良い漁場を求めて日本全国から人が集まり、人口が倍以上に膨れ上がっていた、というお話を元色丹島島民の中田さんから伺った。ロシア側も日本と同じ利用方法をとっている様子で、それだけ北方領土が魅力的な漁場なのではないかと考えた。

他に高校生との対話の中で、北方領土に住むロシアの方の北方領土問題に対する意識について話をすることができた。「日本に悪いと思っていて返したいとも思うが、今の生活を壊したくない」というような意見をもつ人や、そもそも領土問題が存在していることを理解していない人がいるようである。この辺りは、北方領土問題に関する知識や認識の違いが日本人の間にも存在しているように、ロシア人の間にも大きな差があるように感じた。それぞれの意見をどのような属性（年齢、性別など）の人がもっていたのかなど、気になる点が多数あったが、時間の関係で聞くことができなかった。

本事業を通して、私は、北方領土問題の解決に必要なことは、北方領土問題に対する深い理解を日本国民が共有することであると感じた。深い理解とは、北方領土問題が生まれるまでの歴史認識、北方四島の水産や観光資源としての魅力、北方領土に住む人々と元島民と漁業関係者など、北方領土に関わる人々を取り囲む状況を理解することである。日本政府がロシアとの交渉することは大切であるが、それ以上に国民の無関心が問題の停滞につながっているように思えてならない。北方領土に関する情報を発信する側も、受信する側も、各々の立場を尊重して、問題への理解を深めなければならないのである。

今回の北方領土の視察において、私は、「北方領土におけるビジネス」「北方領土問題および活用法の伝え方（ブランディング）」という点を意識して現地視察を行いました。質問として以下の五つを考えており、その視察結果について今回まとめました。

- ① 北方領土が返還された際に臨む事（どのように活用されるのが望ましいと考えるか）
- ② 根室市や釧路市、北方領土の共通点
- ③ 北方領土周辺のビジネスの強さ、または弱さはどんなところにあるか
- ④ 今後強化していく、または強みになるであろうものはあるか
- ⑤ 現地ではどのように全国北方領土について知ってもらう取り組みをしているか

一つ目ですが、現地の方で元島民などのご年配の方は「返還」を強く望まれているようです。しかし、根室市の高校生との意見交換では、「共存」という解決策が望ましいとしている高校生が多く、こちらの方が現実的な解決策のように私は感じられました。

二つ目では、やはり共通点として漁業を主として産業が成り立っているということでした。現地での視察では、漁や昆布取りをする漁師の方を多く拝見する事が出来ましたが、特に北方領土では漁場が豊かとお話も伺えました（海のプランクトンなど環境が良い）。

三つめでは、北方領土へのビザなし交流に行かれた高校生のお話を伺うと産業はほとんど漁業が中心でそれで成り立っているようだというお話でした。逆にインフラ設備等に弱さがあり、「共存」という選択肢でロシア側の生活インフラの発展・日本の漁業のよりいっそうの活性化が図られるのではないかと感じました。

四つ目では、官民の連携、産学連携が重要ではないかと感じました。市役所の方のお話を伺った際に官民の協力があまりなされていないように感じました。官は官、民は民と分けるのではなく一体となって北方領土の返還問題に取り組む必要があると考えます。また、産学連携が重要という理由は高校生のビザなし交流などの交流はあるものの、大学等でのそのような取り組みが薄いように感じます。大学の研究の一環としての北方領土の調査、実際の北方領土への訪問を増やすことで、将来の北方領土返還、その活用がスムーズに行くのではないかと思います。

最後の質問では、取り組みとしては主に、署名活動、ビザなし交流、出前での出張講義などが挙げられるようです。特に署名活動では、根室市の観光名所や北方領土にまつわる名所に必ずと言っていいほど署名が出来る署名書が置いてありました。毎年かなりの数の署名が集まっているようですが、それをツールにどのように有効的に活用していくかという事は、やはり政府にかかってくると考えます。

今回の視察を受けて、高校生・元島民間問わず現地の方、政府、根室市などが一体となりこの北方領土問題に取り組む事が解決の一番の近道だと感じました。様々なところで連携をとり解決する事で返還以降のビジネスの発展も大きく望めると私は思います。

今回、北方領土青少年現地視察事業に参加したことにより、北方領土問題に対する認識が変化した。変化した3点の認識を以下に記す。

1つ目は、北方領土が返還されることによるメリットである。私は元々、北方領土が返還されることによって、元島民が故郷へ自由に帰れるようになることがメリットだと考えていた。返還されるメリットはそれだけでなく、北方領土にある漁業資源を手に入れることができることである。北方領土の近海は、世界三大漁場の1つに数えられる魚の宝庫であったと言われている。また、現在根室市で行われている昆布漁のために、日本は多額の資金をロシアに支払っている。多額の資金を払って、歯舞群島付近まで昆布漁ができるようになってきている。北方領土が返還されることによって、そのような多額の資金が不要になる。

2つ目は、私たちのような若い世代が北方領土問題に向き合っていかなければいけないことである。1945年に北方領土問題が生じてから、約70年が経とうとしている。元島民の人数も減少していて、同時に北方領土問題に熱のある人材が減少している。そのため、高齢化している元島民からバトンを受け取り、若い世代が元島民の意思を受け継がなければならない。しかし、根室高校・根室西高校の北方領土研究会の方から話を聞くと、日本の若い世代どころか、北方領土に近い根室市の若い世代でさえ、北方領土問題に関心が薄いことがわかった。さらに、若い世代の現在の活動として、出前講座やFMラジオによる北方領土問題の認知・署名活動による政府への伝達が挙げられるが、これらは北方領土問題の解決には直接関わることが出来ないこともわかった。最終的には、政府に北方領土問題に対して向き合ってもらい、解決してもらう以外に手段がないのである。しかしそのためには、先ほど挙げた若い世代の活動が重要となってくる。若い世代の活動によって、日本の北方領土問題に対する熱を高めていく必要があると感じた。

3つ目は、北方領土に住むロシア人への認識である。北方領土は戦前まで一度も日本の領土以外になったことがなく、終戦後に無理矢理ロシアに奪われていった。そのような土地に住んでいる人は、北方領土問題についてどのように考えているのか。そのことについて、北方領土に住むロシア人とビザ無し交流をした高校生に聞いたところ「本当はロシアが過ちを犯しているのではないかという認識はあるが、北方領土を返還してしまったら現島民の生活はどうなるのか」と語っていた。日本だけでなくロシアへの配慮も忘れない、Win-Winの解決策が生まれることを強く望んだ。

本事業に参加する以前は、なぜ日本とロシアとの間に北方領土問題が生じているのか認知していなかった。北方領土問題が原因で日本とロシアとの間に亀裂が入っているのであれば、北方領土をロシアに手放して、平和な世界になってほしいとさえ考えていたこともあった。しかし本事業を機に、私たち若い世代が北方領土問題について真剣に向き合っていかなければならないと痛感した。今後とも北方領土問題に興味・関心を持ち続け、返還運動に関わっていきたい。

私は、北方領土青少年現地視察事業にある目的をもって参加した。それは、元島民やロシア人など領土問題に関わる様々な人が、この問題に対しどのような思いで向き合っているのかを知るとのことだ。また、知見を深めることでこの問題に対し、自分がどのように向き合っていくべきか考えるためでもある。実際に参加してみて、現地の見聞でしか知ることができない様々な立場の人の思いや現実を知ることができた。中でも特に印象に残ったことについて述べていきたい。

まず、世代による意識の格差について。私たちは、色丹島の大島出身の中田さんからさまざまなお話を聞くことができた。中でも、「ロシアを許せない、絶対に私たちの島を返してもらおう!」と強い口調で領土返還への熱い思いを話されている姿に、私は圧倒された。しかし、「私は68年間頑張ってきた。後は次の世代に任せる」と半ばあきらめのような本音を見せる姿もあった。次の世代に任せるといっても、中田さんをはじめとした元島民の領土返還の熱意は、領土を襲撃された経験のない若者に届いているだろうか。

根室市内の高校の「北方領土研究会」に所属する生徒4名と対話する機会があった。根室市というのは、「北方領土は日本の領土」「北方領土を返せ!!」という強い主張の看板がまち中に設置されており、市内在住の若者は領土返還への問題意識が高いと私は思っていた。しかし、生徒に話を聞くと研究会所属以外の生徒は北方領土に関心をあまり持っていないという。なぜなら、義務教育からその後まで際立って北方領土問題について教えられないことないからだという。北方領土に1番近いまち根室市でさえ、若者の関心が薄いというのは驚きとともに、元島民の熱意が継承されないという危機感を感じた。

次に、北方四島在住ロシア人の日本に対する思いについて。ロシア人にも世代による格差があるようだ。侵略の歴史を知るロシア人老婦は、涙しながら日本に申し訳ないと語っていたという。一方で若者は、歴史を知らないのか領土問題について特に意識がないという。むしろ、日露戦争など日本がロシアに侵攻した歴史を引き合いにだすことで、日本はひきょうものというイメージをつけようとしているのが教育事情らしい。このようなことは、北方四島返還のさらなる障壁となりかねないため北方領土問題の早急な解決を願うばかりだ。

最期に、自然環境について。北方領土が侵略されたことにより、水揚げ量の減少、領海を超えれば拿捕や命の危険などさまざまなデメリットが生じたがそれだけではない。ロシアは北方四島を自然保護区に指定している。そのため、蝦夷鹿などの動物たちの餌となる資源や住み家が豊富に残っているのだ。おかげで、絶滅危惧種と言われる動物たちも多く生息できているというメリットもあるのである。

おわりに、自然環境についてで、デメリットだけでなくメリットもあると述べた。しかし、デメリットとメリットを鑑みてもやはり北方四島は返還されなければならない、この事業を通して強く感じた。根室で受け取った返還への熱意というバトンをうちに秘めるのではなく、このバトンを次につなぐことが今後の私たちの使命である。

私は、今回の北方領土視察事業の視察前研修を受けるまで、北方領土はロシアに占領されているが、日本人も住んでいるのだと思っていた。しかし実際は、北方領土に住むことも、近づくことも許されていないという領土問題の深刻さを突きつけられた。今回の視察で初めて知ったこと、学んだことも多く、とても良い学びの場になった。

今回、一番印象に残ったのが、現地の高校生との交流だった。北海道に住んでいる人の北方領土問題の教育に興味があった。一般的に、小学校などで自分の住んでいる地域の歴史や地理を詳しく学ぶと思われる。そして、北海道では、やはりほかの地より、北方領土について詳しい教育を受けているのだと思った。しかし実際に話を聞いてみると、北方領土について特別な教育もないし、そもそも北方領土問題に興味がない人も多いことを知った。今回、交流をさせてもらったのは、高校で北方領土問題に関した活動をしている高校生たちだった。彼らは、親族に元島民の方がいる友達に誘われてその活動に参加していると話していた。彼らも最初から北方領土に関心があったわけではなかった。また、活動をしていない同年代の友達などはほとんどあまり関心がないという話も聞いた。彼らは主に県外に訪問し、北方領土問題の深刻さや彼らの思いを伝えていた。しかし、本来なら北方領土とあまり関わりのない県外の人に向けて行う講演を、自分たちの高校で北方領土問題の関心が薄いために、自分たちの高校生の生徒に向けて行ったこともあるという話も聞いた。私は、今まで北海道、特に根室の人たちは北方領土に対して強い思いがあるのだと思っていた。また、根室で「返せ！北方領土」というメッセージ性の強い看板をよく見かけることが多かった。そういった看板のイメージとは違い、現地の多くの方は、さほど自分たちと意識の差はあまり変わらないと感じた。また、北方領土問題の解決の仕方が年代によって違うということも驚いた。元島民の方は、やはり自分の土地を取られたという思いが強く、なんとしてでも故郷に帰りたいという思いが強かった。しかし、現地の高校生や若年層の方は、ロシアと日本の雑居を目標にしている人が多いことを知った。現地にいる人の北方領土問題に関する意識の差や、返還後の土地の利用などについての思いの差があることを知った。

今回の視察で、船の上から北方領土を眺め、日本の固有の領土であるのに、立ち入れないもどかしさを感じた。また、普段の生活では感じることの少ない「国境」を感じることができた。ホテルで出会ったロシア人の方にロシア語で挨拶したら、笑顔で返してくれたこともあった。元島民の方の故郷を返してほしいという壮絶な気持ち、高校生たちの雑居の目標。単なる「土地」の問題ではなく、領土問題にはさまざまな人の思いがあるのだと肌で感じる事ができた。すべての人の思いをくみ取ることは難しいかもしれないが、将来、国境にとらわれることのない世界が来ると良いと心から感じた。

実際に北方領土を目で見ることによって、今まで自然と軽視していた北方領土問題について身近に感じることができた。また、北方領土問題と名前はついているが日本には竹島問題など多くの領土問題が存在している。これらの問題に関しても今回の視察でより現実味のある問題として感じることができた。

北海道に到着し、バスで根室市を走っていると市内には「返せ！北方領土！」という看板がたくさん立ち並んでいた。この看板は実際にロシア人が見るわけではない。住民たちのやり場のない怒りを感じ、またこの北方領土問題に関して忘れてはいけない問題であると住民たちは考えているのだと伝わった。私は北方領土問題に関して現地に訪問するまで義務教育で習うような基礎知識しか知らず、元島民が故郷を余儀なく離れさせられ悲しい思いをしているというくらいでしか認識してなかった。しかし、元島民の体験談を聞くことにより農業・水産業の撤退、農家・家畜の手放し、本島で最も近い根室市への避難を遮る空襲など多くの問題に直面していたことがわかった。これらの被害を忘れてはいけない、歴史を歴史だけで捉えてはいけない。現在と関連させてまだ傷の癒えてない元島民のためにも知ることが領土問題解決への第一歩であると考え、そのような元島民の話をもっと広めることが私たち青少年の役目であると感じた。

また、今回の視察で最も意識した問題として北海道本島に住む人々の北方領土問題に関する意識の温度差である。実際に現地の北方領土問題に関連する学生団体の話を聞き、彼らの周りの方々はそれほど関心を示していないということだ。この問題を解決することも必要であると考え、そのためにも講演会の充実など世間により広める機会を増やすことも重要であると考えた。

また、北方領土返還が第一であるが実際に返還してからのビジョンも大切であると考えた。どのような事業を展開していくかである。北方領土は自然が豊かであり観光地としても充実した土地である。また実際に元島民の故郷への帰還、本島の人々の北方領土への訪問を促す事業展開も必要であると感じた。今回の現地視察ではそのような話は聞くことができなかったため、また機会があれば関心を深めていきたい。

実際に北方領土を目で見、一番北方領土問題に関連のある根室市での様々な施設を訪問することにより、より領土問題について身近に感じる事ができた。また元島民から「元島民の数は年々少なくなっている。そのため私たちの体験、思いを今度は若いみなさんが後世に伝えていき私たちの後継者を育ててほしい」という言葉を受けた。私たちはまず今回の現地視察で得た知識を周りに広めていくことが役目であると感じた。そして、一日でも早く北方領土四島全てが返還されることを望む。

今回私が北方領土青少年視察事業に参加しようと思った理由は、もともと北方領土問題に関心あったからという訳ではありませんでした。どちらかといえば、私は今まで日本を取り巻く状況や問題について関心がなく、北方領土問題についても細かいことはまったく知りませんでした。そのような自分に対し、私は危機感を感じていたので、この北方領土青少年視察事業のことを知ったときに、私は自分の意識を変えるいいきっかけにしたいと考え、参加しました。

北方領土視察事業にいく前に私が興味をもって、事前学習として行ったのは、元島民の方達の北方領土に対する想い、北方領土返還活動に取り組む地元の若者たちの活動の動機、また現在北方領土に住むロシア人の考えでした。私たちが今回の視察事業で実際に話をお聞きすることが出来たのは、北方領土の元島民の方、また現在北方領土返還活動を行う地元の根室市の高校生の方からでした。

お話を聞いて私が感じたのは、今、「北方領土問題に関っている人たちは誰も悪くない」ということです。元島民の方は自分の住んでいる土地を突然理不尽に奪われて、異なる土地での暮らしを余儀なくされたので自分の故郷に戻りたい。とおっしゃっていました。これは当たり前のことで、その願いが叶えられるのが当然と考えます。しかし、北方領土に住んでいるロシア人も北方領土問題に関するいきさつを知っていたとしても、自分の先祖が昔から住んでいたから当たり前のように今も住んでいるだけなのです。北方領土に暮らすロシア人にとっても今の暮らしが突然奪われることは考えられないと思います。どちらの言い分も間違っていないし、どちらも尊重すべきだと思います。

そのような二つの考えはあるものの、根室市の高校生から聞いた北方領土におけるロシア人と日本人の交流事業の話の中では、北方領土に住むロシア人のとても友好的な印象を受けましたし、根室市の北方領土対策課の方の話によれば、実際にロシアが国としてどのような対応をしてくるかは別としても、北方領土に住むロシア人が両国民の雑居を提案を提案するなど、これからの北方領土については時間がどれだけかかるかはわからないとしても、これからの北方領土返還については希望がもてる状況ではないかと感じました。しかし、北方領土の元島民の方の平均年齢が80歳を越え、元島民の方の数が減少しています。その中にはきっと、今回お話を聞いた元島民の方以外にも、北方領土の返還を願っている人も少なくないと思います。元島民の方は「自分たちが生きている間にとりもどすのは難しいので、次の世代の若い人たちに引き継いでほしい」とおっしゃっていました。

このような想いに対して私ができることはとてもすくないですが、私の周りからでも少しずつ、北方領土に関する話を周りの人たちに話して、北方領土に対する関心を広めていこうと思います。

そして、それが微々たるものだとしても、北方領土問題解決の早期解決につながるように努力し続けたいと考えます。



今回の北方領土青少年現地視察事業を通して、私は以前よりも北方領土について多くのことを知ることができ、領土問題について深く考えることができるようになったと思う。北方領土問題についてはいままで、ニュースや学校の授業などで取り上げられているときしか関わり、知る機会がなかった。また、それらによって得られる情報量も限られたものであったため、ほとんど知識もなく、事前レポートですらどのように書けばいいのか分からなかったほどであった。しかし、現地でさまざまな資料を見たり、元島民の方や北方領土対策課の方、現地の高校生のお話を聞いたりすることによって、色々な視点からこの問題について考えることができたので、非常に有意義に感じた。

北海道立北方四島交流センターの施設見学では、北方四島の歴史や住民がどのような生活を送っていたか、ロシアの文化についてなどを展示物を通して学んだ。私は以前から北方領土においての人々の暮らしがどのようなものであったか気になっていた。北方四島は漁業が盛んで、当時の写真を何も知らない状態で見たら、もうこれらの島々には日本人は一人も住んでいないということが信じられないほど島々は活気に満ちていた。写真では北方領土の様子を見たことがなかったので、島の様子や人々の暮らしをこれらを通して知ることができて良かった。ロシアの文化についてもいままで知識がない状態だったので新鮮に感じた。

二日目に行われた元島民の中田勇さんの講話では、当時、色丹島で生活していたときの話や戦後ソ連に占領された後の話などを聞いた。この機会に話せることはできる限り話そうとしていた中田さんからはなんとしても北方領土を取り戻してほしいという気持ちが伝わってきた。一番心に残ったのはもし北方領土が日本の手に完全に戻ってきたらまた住みたいと言っていたことだ。仮に住むとしても便利さは今住んでいるところよりは明らかに劣るだろうし、実際に住むことはあきらめている元島民もいることから、中田さんの北方領土に対する思いが相当なものであると見て取れた。三日目に行われた地元高校生との意見交換では最初、高校生も中田さんと同じような意見を持っていると思っていたが、予想に反しロシア人との共存を希望する高校生が多かった。街中に「返せ！北方領土！」の文字がみられる根室の中でもさまざまな意見があることに驚いた。また、高校生にして領土問題に対する意見を持っていることに感心した。

私は以前、領土問題は戦争が起きない限り解決しないと聞いたことがあるが、仮にそうだとするとそれを理由に何もしないのではなく、解決に向かってさまざまな視点からこの問題について考えていく姿勢が大切なのではないかと感じた。

北方領土問題について全く知識がなかった私にとって、事前学習が今回の北方領土視察事業の始まりだった。

事前学習のときに、私は今まで「北方領土問題」についてどのような解決策が提唱されてきたかを調べた。「四島返還論」、「二島譲渡論」、「面積2等分論」など様々な解決策がでてきたが、そこで私はふと疑問に思ったことがあった。それは、「二島譲渡論」や「面積2等分論」を提唱している人は、北方領土問題解決の意義をどこに置いているのだろうか、ということである。

今まで日本はロシア政府に対して「四島返還」を訴え続けてきたが、話は平行線をたどったままであった。それゆえに、「二島譲渡論」や「面積2等分論」などの解決策が出てきた。しかし、それらの解決策では元島民の「故郷を返してほしい。」という思いは叶わない。そのうえ、元島民の思いや元々日本固有の土地であった云々よりも、一刻も早くロシアとの領土問題を解決し、平和条約を結ぶということの方を重視しているような印象を受ける。

確かに、北方領土問題は自分が思っていた以上に複雑な問題であり、容易に、どの解決策が一番適しているとは言えない。しかし、北方領土問題を解決する目的を、ロシアとの領土問題を解決すること自体や平和条約の締結などに見出してはいけない。「四島返還論」以外の解決策を掲げるにしても、もっと元島民の方々の故郷を奪われた気持ちや、さらには今現在北方領土に住んでいるロシアの人々の気持ちを尊重すべきであると、私は今回の事業を通して強く感じた。

また、今回の北方領土視察事業では、主に別海町と根室市の北方領土問題に関する資料館などを見学したのだが、行く先々やその途中の道などで「返せ！北方領土」や「われらの北方領土」などと書かれた看板を見かけた。はじめは、別海町や根室市が比較的北方領土に近いこともあり、北方領土問題に対する人々の関心が強いのだと思った。しかし、事業の3日目に行われた根室市の高校生との討論会でそのことについて尋ねてみると、根室市でも他の都道府県と同じくらい北方領土問題に対する関心は低く、むしろ、もっと北方領土のことについて知ってもらおう活動をしているとのことだった。

私は改めて北方領土問題に対する国民の関心の低さを知るとともに、その現状に危機感を覚えた。元島民の方々の高齢化もあり、数十年後には北方領土問題についての実体験を話せる人がいなくなってしまう。そうなってしまうと、北方領土返還運動を広めることもより困難になってくる。その前に、ひとりでも多くの人に北方領土問題について関心を持ってもらい、返還運動がもっと活発になることが求められる。

しかし、元島民の方々の代で北方領土問題を解決することは難しいかもしれない。それゆえ、今度は私たち若い世代が元島民の方々からバトンを受け取り、領土返還の実現に向け、返還運動に参加したりや周りの人に北方領土問題について教えてあげるなど、小さいことでもいいので一人ひとりができることをやっていく必要がある。そして、私たちが年をとったら、また下の世代にバトンを渡し、領土が返還されるまで、「叫びの像」のように何代にもわたりバトンを引き継いでいくべきである。

今回の視察事業を通し、北方四島及び領土問題への見方が大きく変わった。元島民の講話、根室市の高校生との意見交換、四島に関する資料館、そして船に乗り国後島の遠望などで、今までうすぼんやりとしていた領土問題が北海道根室市をはじめとする日本全体が抱えるものだと再認識した。

事前レポートでは領土問題に関する授業や特別講義を道が先導し道内の児童・生徒に四島の歴史や領土問題の理解を深めるプログラムの有無や、家系を通じての口伝等が行われているかを掲げた。根室市の高校生との意見交換の際に尋ねたところ、実際はそのようなことは行われておらず、四島に近い道東に住む人々でさえその興味関心の度合いには個人差があるのだという。また同様に、領土問題に対する地域の一体性も無く、住民全員が返還運動に躍起になっているというわけではないこともわかった。しかしながら根室市には北方領土対策課というものが置かれており、返還要求大会や四島についての学習会など、自治体レベルでの活動は行われている。また、返還要求の主張性は若い世代になるにつれて弱まっていく傾向にあった。聞くと、中高生のビザ無し交流では現在の島民（ロシア人）と単純に仲を深めるだけであり、領土問題に関する話題はほとんど挙がらないのだという。しかし年配の島民ほど罪悪感が強いらしく、しかしだからといってすぐさま日本に居住地を明け渡す訳にもいかず、結局は国同士が動かなければどうにもならないという意見が多数であり、高校生自身の意見もロシア人との共存を目指す者がほとんどであり、直接の解決にはつながらなかった。

だが、歴史的観点から見ても四島は明らかに日本の領土であるので四島返還、二島返還、雑居地化のいかなる目的であれ国民の運動は継続していかなければいけない。さらに元島民曰く、四島は何より資源が豊富であるという。これは、ただ単にEEZ（排他的経済水域）を確保するという意味以外にも島としての役割を十分に果たすことができる。さらに今なお道路やライフラインの整備が整っていないので広大な土地を利用した大規模開発の可能性もあるので、ビジネスという面からも返還運動は継続していく必要が大いにあることがわかった。

最後に、今回の視察先である北方領土はもちろんのこと、領土に関する国が抱える問題を解決していくにはまず知ることが最優先事項であり、国民と問題の距離を縮めることが大切なのだと気づかされた。そのためにも視察を経験した我々が今回での学びを伝えていかなければならないと感じた。

今回の研修で私は北方領土問題最前の地に住む方の感じていることを知り、それを理解したうえで北方領土問題に対する自分の考え方をもちたいと考えていた。印象に残っていることは大きく 2 点ある。

1 点目はやはり地域の方との交流である。今回は元島民の方や、これからの返還運動を担う高校生の方と交流を行った。元島民の方の講演からは北方領土返還に対する強い意志が感じられた。一方、現地の高校生は、元島民の方々の強い返還要請運動には違和感に似たものを感じるというほどに返還に対する強い意志が感じられなかった。高校生の意見としては、北方領土を国境という概念無く日本とロシア人が共生できるようにする方向に持っていきたいとのことだった。正直、私はこの考えには賛成できない。法整備の部分や安全保障の部分に大きな課題が残るからである。

高齢の元島民の方は、私たち若い世代に返還に対する熱い気持ちのバトンを渡したいと話してくださった。しかし、高校生との話の中では「どうせ解決は難しい」といった、あきらめに近いような部分も感じられた。この世代を超えた意思疎通がされていないことと、どこかに「あきらめ」の気持ちがあるということが、北方領土が日本で最も解決に近い領土問題であるにも関わらず、なかなか解決に向け発展しないことの根底にあるのではないかと感じた。

今求められていることは、意思の統一と、一刻でも早く元あるべき姿に領土を戻すという強い意志であると私は考える。主張することが何よりも大切であり、それに多くの国民が賛同した時の力が国をより動かし、結果的には解決へ近づいていくのではないだろうか。

2 点目は納沙布岬からの風景である。最も近いところで約 3.7 キロメートル先にある北方領土のその近さには驚いた。また、約 1.8 キロメートルには中間線があり、その線から日本側にのみ多くの漁船があり、窮屈そうに漁をしている姿。また、海上保安庁の巡視船がいる姿。この風景を見たとき、私は北方領土問題を非常に近く実感することができた。あの景色を見ると、多くの人が私のように身近に北方領土問題を実感できるのだと思う。それほどに衝撃的であった。

今回の研修を通じて領土問題に対する自分の姿勢は少し変わった。以前は安全保障の観点から 2 島返還のヒキワケでもよいから、ロシアと平和条約を早急に結んだほうが国益になると信じていた。しかし、元島民の方の返還に対する熱い気持ちを知った今では、もっと様々なことを、聞き、学び、考え直そうという気持ちになっている。

今回の研修では領土問題はもちろん実際に足を運び考えることで、多くのことを得ることができるということを学んだ。今回の研修に参加したからには、今回の研修で感じたことを多くの人に発信し、北方領土問題解決に向けた力になることが責務であると感じている。

現在、日本が直面している領土問題には、北方領土、竹島、尖閣諸島とあるが、その中でも竹島や尖閣諸島の方がクローズアップされることが多いように感じる。実際、ニュースなどで北方領土に関する話題を目にするのは少なく、私自身、教科書などで学んだ一般常識程度にしか知識がなかった。視察の事前学習としてインターネットなどで調べたりもしたが表面的な歴史や数字しか載っておらず、当時や今の具体的な状況を知ることは難しかった。そんななか今回の現地視察では、元島民の方の講話や現地訪問した高校生との意見交換をする機会があり、北方領土の真実を知ることができた。

特に色丹島出身の中田さんによる講話では、ソ連軍の侵攻から島を追放されるまでの話が印象深かった。ソ連による占領後、島民はソ連軍に抑圧された苦しい生活を送っていた。島に住む女性は顔に墨を塗り、頭を丸め、男装をして屋根裏に隠れて身を守ったという。恐怖する島民を横目にソ連軍は民家にあがりこみ、時計や万年筆、家畜など金目のものを奪い、ロシアが占領したという主張のために島中に赤い布が立てられた。なかには脱出を試みる島民もいたが、ソ連兵に射殺され命を落とした人も大勢いたという。昭和 21 年に締結された「米ソ引揚協定」により全島民の引き上げが決まったが、移動中の環境はひどいもので、ようやくたどり着いても漁業を続けることは難しく、農業に就くなどしてなんとか生活していたようだ。

そして現在、ロシア政府が進める開発計画により巨額の資金が北方領土に投入されており、かつて日本人が埋葬されていた墓地がロシア人墓地となっているなど、日本人集落の面影はほとんど残っていないということを知った。その一方、ロシア人のなかにも「日本の主張が正しいのではないか」という人もいて、学校で日本語が教えられていたり、日本の技術が信頼されていたりと、親日的な意識をもつ人も少なくないという。平成 4 年から始まった「ビザなし交流」は、日本人と北方四島に住むロシア人との相互理解を目的に、友好関係を深めるために行われている。ビザなし交流によって、ロシア人の日本や日本人に対する誤解が解け、日本の主張が知られるなどの成果をあげることが期待できるだろう。

太平洋戦争が終結して 68 年がたち、17,291 人いた北方領土の元島民の数は約 4 割の 7,105 人に減っている。平均年齢は 79.2 歳となり、かつて島々でどのような暮らしがあり、それがどのように失われたのか、当時の証言を得ることが難しくなりつつある。今なお、具体的進展がないまま今日に至っているが、1 日も早く北方四島の返還を実現するには、政府はもちろん、私たち一人ひとりが北方領土問題に対して関心や理解を深めることが大切である。北方領土問題は関係者だけの問題ではなく、広い地域や世代で共有するべきものだ。講話をしていただいた中田さんの言葉でもあったが、今回私たちが学んだ北方四島返還に向けた強い思いは、自分だけのものにしないで多くの人につなげなければならない。若い世代や北方領土から遠く離れた人たちまでもが一丸となってアピールすることが返還実現への後押しになるはずだ。